思いがけずも サンパウロで本屋の主

高野泰久

書店玄関。中は交流の場

「どうして本屋になったの？」

「どうして，BRASILに来たの」，「なぜ，移民したの」と問われると，今でもまともに答えられず，ただ口ごもるばかりだが，それと全く同じか，あるいはそれ以上に返事に困るのが，「どうして，なぜ本屋になったの……」と聞かれることだ。すでに20年近くも繰り返される問いかけなのに，「そう聞かれても，これはほんとにひょんなことから……」といまだに答にもならないつぶやきをするのが精いっぱいだ。

日本からの企業進出がもっとも盛んだった1970年代の中頃，新来移民として10余年の生活体験をし，ポルトガル語が少しは理解できることを頼りに，工場建設を始めたばかりの企業で働くことになった。工場が完成していよいよ操業という，ちょうどそのとき，62年5月にサントス港に着いて以来の知人が，「おい，書店を売るという人がいるが，どうだやってみないか」と，突然，全く畑違いの仕事の話を持ってきた。折しも生まれ故郷山梨の田舎の葡萄畑が，中央高速の用地買収の対象となり，賠償金を遺産相続という形で分けてもらい，売りに出た書店の購入資金の一部とした。全く思いがけない二つのことが重なって，75年1月，それこそ“ずぶの素人”の本屋が，東洋人街のはずれに，店開きをすることになった。

当時の日系社会は，すでに後続移民がほとんど途絶え，日本語の本を扱う書店は確実に先細りであり，時代錯誤ではないのかという周囲からの声もあったが，「まあ，何とかなるさ……」といつもの調子で始めてしまったのである。

BRASILを識ってもらうために

戦後移民史のなかに，日本の建設省が主導した「産業開発青年隊」という技術移民集団があった。その一員として来て4年近く奥地で農業を，サンパウロへ出てからの8年前後を，自動車会社で技術者として過ごした。そんな折々の中で日本語書店へ足を運ぶのは，異文化の中に生きる者にとって，何よりの楽しみであり，心の拠り所でもあった。しかし，まさか自分がその道に入ろうとは思ってもみなかっただけに，はじめから試行錯誤の積み重ねが続いた。なにしろ同業の中では一番小さい店構えだったので，「これだけは……」という他の店がやっていない何かが欲しかった。

日本とブラジル，異文化，異民族(多文化，多民族)の中での，日本語の本屋としては，何のために，どんな本を読者に提供し，さらに活字を通して何を伝えられるかを考えあぐね，「これだっ！」と決めたのがBRASILをもっと日本人に識ってもらうことであった。それ以来，「もっとBRASILを識るために」が店の看板となった。

移民，ブラジル，中南米，この枠内に入る出版物なら，ブラジルで出版されたものをも含めて，何でも揃えようと棚は整えたが，はじめの頃は両手で数えるほども並ばなかった。だが，それから20年，世界は動き，BRASILも変わり，日伯関係も年ごとに重要性を増してきた現在では，日本語で出版された移民，ブラジル，中南米関係のものだけで1800冊余りのあらゆる分野の出版物が，本棚を彩り，賑わせている。

団欒，出会いの場として

2年ほど前，今の場所に3階建ての家を購入し，昔の建物の雰囲気をこわさないようにと改修して移り，長年の夢のひとつが実現した。売場面積の3分の1の広さ，と言っても15平方メートル余りだが，そこに，お客様が気ままに本が読めるように椅子を数脚置いたところ，それに座った人たちはもっぱら雑談を楽しみ，ご自由にと置いてあるタバコをふかし，ピンガ（砂糖きびで作る地酒）を酌み交し，30分，1時間と時の経つのはお構いなしだ。

移民社会の縮図でもある同航者仲間の再会の場面，消息のやりとり，思いがけない出会い，人脈の広がり，さらにはBRASIL社会をめぐる厳しい分析と熱い議論，等々。それやこれやに耳を傾けたり，相づちを打ったりも大事な仕事のひとつである。それがいつものことだから，日本の学校が長期休暇に入ると，時間のやりくりはさらに難しくなる。大学の教授，学生，研究者，物書き，ふらっと入って来る旅行者まで，その案内役から，各方面への連絡や問い合わせ，資料集めからそれらの日本への発送と，何が本業なのかわからなくなるのである。

ようやく本屋の顔に

ちょっと自画自賛になるが，「BRASILや移民関係の本のことならまずTAKANOに聞け。あそこで駄目なら仕方がないが，手元になくても探し出すか，それなりの手を打ってくれるはずだ」と，言われるようになってきた。日本語の本に限らず，ポルトガル語の本や古書についてでもある。ようやく看板に偽りなしと言えるようになった。

店内（日本語の書籍がずらりと並ぶ）

この他に力を入れているのが農業関係書だ。現在この国の農業の指導的立場にあるのが，戦後移民の我々の年代であり，これからは国際的視野がないと農業経営は成り立たないという視点からだ。

もうひとつは，次代を託す日系人子弟への日本語教育の重要性から，それに関する本棚の充実である。しかしこの日本語教育問題は，日系人としてその文化の継承を含めてのものなのか，あるいは外国語としてのものか，当事者間でも意見は大

店内カウンターでの高野店主

きく分かれている。私としてはまず外国語として教えるべきものと考えている。

これに関して，日本語とブラジル人，日本文化とブラジル社会とをどういう形で，理解し伝達していくかが大きな課題となってきている。

他には雑誌を含めて，ごく一般的な本を揃えているが，本を求める人たちの言い分に応えていたら，いつの間にか棚の本に一つの傾向が出てきた。本屋の顔ができたというか，固定客に支えられているわけだ。

この人たちが一番求めていることに応えていくのが，これからの店のあるべき姿と考えている。悩みの種は本の値段と，入手するまでに要する時間である。日本で1000円の本がお客様に渡す時には2600円になる。注文して手にするまでに船便だと3カ月近くかかるが，航空便だと高くなりすぎる。時間や経済の面での現実には，その解決の術がないので，せめて読者の注文に応えて，いい本を選別し，本棚に並べていきたいと思っている。

20周年，新たな出発へ

「もっとBRASILを識るために」と看板を掲げて今年で20年。奇しくも1995年は日伯修好100周年と重なる。10年目にはその記念として，日伯交流協会の研修留学生を毎年1人引き受けることにした。彼らの力で真の国際化，交流，そして意義ある貢献がなされる日への，熱い期待をこめてのことだった。そして20年目の新たなる出発に当たって，二つの国と文化の間で，出版物を通じて何をすべきかと，いま思案中である。多文化，多民族の国から日本をみつめていれば，自ずといい企画が生まれてくるものと楽しみにしている。

朝8時半，店を開ける時間だ。今日はどんな出会いがあり，どんな話題がとびかうかと，期待する心の躍りは，まさに移民社会，多文化，多民族の中にあればこそである。本屋冥利に尽きる。

（たかの・たいきゅう／高野書店・店主）